

入射的・射影的と選択公理

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2016年1月23日

定義. C を圏とする.

1. 対象 $I \in C$ が入射的 (injective)
 \iff 関手 $\text{Hom}_C(-, I)$ がモノ射をエピ射に送る
2. 対象 $P \in C$ が射影的 (projective)
 \iff 関手 $\text{Hom}_C(P, -)$ がエピ射をエピ射に送る (エピ射を保つ)
3. C が十分豊富に入射的对象を持つ (enough injective)
 \iff 任意の対象 $X \in C$ に対し, ある入射的对象 $I \in C$ とモノ射 $f: X \rightarrow I$ が存在する. これを $\text{EI}(C)$ で表す.
4. C が十分豊富に射影的对象を持つ (enough projective)
 \iff 任意の対象 $X \in C$ に対し, ある射影的对象 $P \in C$ とエピ射 $f: P \rightarrow X$ が存在する. これを $\text{EP}(C)$ で表す.

例. 集合と写像のなす圏 **Set** の場合.

集合 X が入射的

\iff 任意の単射 $f: Y \rightarrow Z$ と任意の写像 $g: Y \rightarrow X$ に対しある写像 $h: Z \rightarrow X$ が存在して $g = h \circ f$ となる.

$$\begin{array}{ccc} Y & \xrightarrow{f} & Z \\ g \downarrow & \swarrow h & \\ X & & \end{array}$$

集合 X が射影的

\iff 任意の全射 $f: Y \rightarrow Z$ と任意の写像 $g: X \rightarrow Z$ に対しある写像 $h: X \rightarrow Y$ が

存在して $g = f \circ h$ となる.

$$\begin{array}{ccc} Y & \xrightarrow{f} & Z \\ & \nwarrow h & \uparrow g \\ & & X \end{array}$$

□

命題 1. EI(Set) である.

証明. 任意の空でない集合が入射的だからである.

□

定理 2. 次の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. 任意の集合は射影的である.
3. 任意の集合 X に対して, 射影的な集合 Y が存在して $X \subset Y$ となる.

証明. (1 \implies 2) X を任意の集合とする. 任意の全射 $f: Y \rightarrow Z$ と任意の写像 $g: X \rightarrow Z$ を取る.

$$\begin{array}{ccc} Y & \xrightarrow{f} & Z \\ & \nwarrow h & \uparrow g \\ & & X \end{array}$$

f が全射だから各 $x \in X$ に対し $f^{-1}(g(x))$ は空でない. そこで $\{f^{-1}(g(x))\}_{x \in X}$ に選択公理を適用して選択関数 $h: X \rightarrow \bigcup_{x \in X} f^{-1}(g(x)) \subset Y$ を得る. すると, $h(x) \in f^{-1}(g(x))$ だから $f \circ h = g$ である.

(2 \implies 3) $Y = X$ とすればよいから明らか.

(3 \implies 1) 全射の右逆写像の存在を示す. $f: X \rightarrow Y$ を全射とする. 仮定 3 により, 射影的な集合 Z で $Y \subset Z$ となるものが存在する. $a \in Y$ を一つ取る. 写像 $g: Z \rightarrow Y$ を

$$g(z) := \begin{cases} z & (z \in Y \text{ のとき}) \\ a & (z \notin Y \text{ のとき}) \end{cases}$$

で定める.

$$\begin{array}{ccc}
 X & \xrightarrow{f} & Y \\
 \swarrow h & & \uparrow i \\
 & & Z
 \end{array}$$

$i: Y \rightarrow Z$ を包含写像とすれば明らかに $g \circ i = \text{id}_Y$ である. Z が射影的だから, ある写像 $h: Z \rightarrow X$ が存在して $f \circ h = g$ を満たす. このとき $k := h \circ i: Y \rightarrow X$ と置けば $f \circ k = f \circ h \circ i = g \circ i = \text{id}_Y$ である. \square

例. R を単位的可換環とし, R -加群と R -準同型のなす圏 $R\text{-Mod}$ を考える.

R -加群 M が入射的

\iff 任意の単射準同型 $f: L \rightarrow N$ と任意の準同型 $g: L \rightarrow M$ に対し, ある準同型 $h: N \rightarrow M$ が存在して $g = h \circ f$ となる.

$$\begin{array}{ccccc}
 0 & \longrightarrow & L & \xrightarrow{f} & N \\
 & & \downarrow g & \swarrow h & \\
 & & M & &
 \end{array}$$

R -加群 M が射影的

\iff 任意の全射準同型 $f: N \rightarrow L$ と任意の準同型 $g: M \rightarrow L$ に対し, ある準同型 $h: M \rightarrow N$ が存在して $g = f \circ h$ となる.

$$\begin{array}{ccccc}
 N & \xrightarrow{f} & L & \longrightarrow & 0 \\
 \swarrow h & & \uparrow g & & \\
 & & M & &
 \end{array}$$

\square

※ R -加群の完全列 $0 \rightarrow A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow 0$ に対し

$$0 \rightarrow \text{Hom}_R(C, M) \rightarrow \text{Hom}_R(B, M) \rightarrow \text{Hom}_R(A, M)$$

$$0 \rightarrow \text{Hom}_R(M, A) \rightarrow \text{Hom}_R(M, B) \rightarrow \text{Hom}_R(M, C)$$

は完全列. よって

M が入射的 \iff 関手 $\text{Hom}_R(-, M)$ が完全 (\iff 完全列を完全列に送る)

M が射影的 \iff 関手 $\text{Hom}_R(M, -)$ が完全

アーベル群と群準同型のなす圏 \mathbf{Ab} を考える. ($\mathbf{Ab} = \mathbb{Z}\text{-Mod}$ である.) よく知られているように, $\text{EI}(\mathbf{Ab})$ と $\text{EP}(\mathbf{Ab})$ が成立している. $\text{EP}(\mathbf{Ab})$ のよく知られた証明は

1. 任意のアーベル群 A に対し, 自由アーベル群 B と全射準同型 $f: B \rightarrow A$ が存在する.
2. 自由アーベル群は射影的である.

という手順で与えられる. $\text{EI}(\mathbf{Ab})$ の証明も同じように

1. 任意のアーベル群 A に対し, 可除アーベル群 B と単射準同型 $f: A \rightarrow B$ が存在する.
2. 可除アーベル群は入射的である.

という手順で与えられる.

※ R -加群 M が可除 \iff 任意の $x \in M$ が可除元.

$x \in M$ が可除元 \iff 任意の非零因子 $r \in R$ に対してある $y \in M$ が存在して $x = ry$ となる.

どちらの証明も 1 は選択公理を使わずに (ZF で) できる. 問題は 2 である.

定理 3. 次の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. 任意の単位的可換環 R と R -加群 M に対して次が成り立つ.

任意のイデアル $I \subset R$ と任意の準同型 $\varphi: I \rightarrow M$ に対してある準同型 $\psi: R \rightarrow M$ が存在して $\psi|_I = \varphi$ となる.

$\implies M$ が入射的

3. 任意の単項イデアル整域 R に対して, 可除 R -加群は入射的.
4. 可除アーベル群は入射的.

証明. (1 \implies 2) 単射準同型 $f: L \rightarrow N$ と準同型 $g: L \rightarrow M$ を取る. f により $L \subset N$ とみなす. 集合

$$X := \{(A, h) \mid L \subset A \subset N \text{ は部分加群, } h: A \rightarrow M, h|_L = g\}$$

を考える. X に順序 \leq を

$$(A, h) \leq (B, k) \iff A \subset B, k|_A = h$$

で定めると (X, \leq) は帰納的順序集合となり、Zorn の補題より極大元 $(A, h) \in X$ が存在する。

$A \subsetneq N$ と仮定する。元 $x \in N \setminus A$ が取れる。 $B := A + Rx$ と置く。 $I := \{r \in R \mid rx \in A\} \subset R$ はイデアルである。準同型 $\varphi: I \rightarrow M$ を $\varphi(r) := h(rx)$ で定める。仮定から $\psi: R \rightarrow M$ が存在して $\psi|_I = \varphi$ である。さて、準同型 $k: B \rightarrow M$ を任意の $a \in A$ と $r \in R$ に対して $k(a + rx) := h(a) + r\psi(1)$ と定める。これは well-defined である。

$\therefore a_0 + r_0x = a_1 + r_1x$ ($a_0, a_1 \in A, r_1, r_2 \in R$) とすると $(r_0 - r_1)x = a_1 - a_0 \in A$ だから

$$h(a_1 - a_0) = h((r_0 - r_1)x) = \varphi(r_0 - r_1) = \psi(r_0 - r_1) = (r_0 - r_1)\psi(1).$$

故に $h(a_0) + r_0\psi(1) = h(a_1) + r_1\psi(1)$ である。

このとき $k|_A = h$ だから $(A, h) \leq (B, k)$ である。明らかに $A \subsetneq B$ だから (A, h) の極大性に矛盾する。故に $A = N$ が分かり、 $g = h \circ f$ である。

※ 逆「 M が入射的 $\implies \psi|_I = \varphi$ なる $\psi: R \rightarrow M$ が存在する」は選択公理によらず成り立つ。それは次の図式から明らか。

$$\begin{array}{ccccc} 0 & \longrightarrow & L & \longrightarrow & N \\ & & \varphi \downarrow & \swarrow \psi & \\ & & M & & \end{array}$$

(2 \implies 3) R を単項イデアル整域、 M を可除 R -加群とする。任意のイデアル $I \subset R$ と任意の $\varphi: I \rightarrow M$ を取る。仮定 2 により $\psi|_I = \varphi$ となる準同型 $\psi: R \rightarrow M$ を見つければよい。 $I = 0$ のときは自明だから $I \neq 0$ とする。 R が単項イデアル整域だから、ある $\alpha (\neq 0) \in R$ を使って $I = (\alpha)$ と書ける。 $\varphi(\alpha) \in M$ なので M の可除性により、ある $m \in M$ が存在して $\varphi(\alpha) = \alpha m$ となる。そこで $\psi: R \rightarrow M$ を $\psi(r) := rm$ で定めれば $\psi(\alpha) = \alpha m = \varphi(\alpha)$ だから $\psi|_I = \varphi$ である。

(3 \implies 4) \mathbb{Z} は単項イデアル整域である。

(4 \implies 1) 選択公理と同値な次の命題を示す。

集合族 $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ が「任意の $\lambda \in \Lambda$ に対し $|X_\lambda| \geq 2$ 」を満たすとき、有限集合の族 $\{F_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ が存在して任意の $\lambda \in \Lambda$ に対して $\emptyset \neq F_\lambda \subsetneq X_\lambda$ となる。

※同値性の証明は the Axiom of Multiple Choice の定理 2 を参照.

集合族 $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ が「任意の $\lambda \in \Lambda$ に対し $|X_\lambda| \geq 2$ 」を満たすとす。これらは互いに素としてよい。 $X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ と置く。 X を基底とする \mathbb{Q} 上の線形空間を V とする。以下これを可除アーベル群として考える。 $H := \langle x - y \mid \text{ある } \lambda \in \Lambda \text{ が存在して } x, y \in X_\lambda \rangle \subset V$ は部分群で、 $D := V/H$ も可除アーベル群になる。 $v \in V$ の属する同値類を $\bar{v} \in D$ で表す。任意の $x, y \in X_\lambda$ に対し $\bar{x} = \bar{y}$ である。よって $\bar{x} \in D$ は $x \in X_\lambda$ の取り方によらず、 λ のみから定まる。そこで $\hat{\lambda} := \bar{x}$ と定める。 Λ で生成される自由アーベル群を F とする。

$$m_\lambda := \begin{cases} |X_\lambda| & (|X_\lambda| < \infty \text{ のとき}) \\ 2 & (|X_\lambda| = \infty \text{ のとき}) \end{cases}$$

として、 $f(\lambda) := m_\lambda \lambda$ と $g(\lambda) := \hat{\lambda}$ により、単射準同型 $f: F \rightarrow F$ と準同型 $g: F \rightarrow D$ が得られる。

$$\begin{array}{ccc} 0 & \longrightarrow & F \xrightarrow{f} F \\ & & \downarrow g \quad \swarrow h \\ & & D \end{array}$$

仮定 4 より可除アーベル群 D は入射的、よって準同型 $h: F \rightarrow D$ で $h \circ f = g$ を満たすものが存在する。 $\lambda \in \Lambda$ に対して

$$\hat{\lambda} = g(\lambda) = h(f(\lambda)) = h(m_\lambda \lambda) = m_\lambda h(\lambda).$$

$h(\lambda) \in D = V/H$ だから、ある $v_\lambda \in V$ を使って $h(\lambda) = \bar{v}_\lambda$ と書ける。 $v_\lambda = \sum_{x \in X} \alpha_x^{(v_\lambda)} x$

($\alpha_x^{(v_\lambda)} \in \mathbb{Q}$ は有限個を除いて 0) と一意的に書けて、このとき

$$\hat{\lambda} = m_\lambda h(\lambda) = m_\lambda \bar{v}_\lambda = \overline{m_\lambda v_\lambda} = \overline{\sum_{x \in X} m_\lambda \alpha_x^{(v_\lambda)} x}.$$

任意の $y \in X_\lambda$ を一つ取れば取れば $\hat{\lambda} = \bar{y}$ だったから $\bar{y} = \overline{\sum_{x \in X} m_\lambda \alpha_x^{(v_\lambda)} x}$ である。故に

$(m_\lambda \alpha_y^{(v_\lambda)} - 1)y + \sum_{x \neq y} m_\lambda \alpha_x^{(v_\lambda)} x \in H$ だから、任意の $x \in X_\lambda$ に対して $m_\lambda \alpha_x^{(v_\lambda)} \in \mathbb{Z}$ と

なる。よってある $n_x \in \mathbb{Z}$ が存在して $\alpha_x^{(v_\lambda)} = \frac{n_x}{m_\lambda}$ と書ける。このとき

$$\overline{\sum_{x \in X_\lambda} m_\lambda \alpha_x^{(v_\lambda)} x} = \overline{\sum_{x \in X_\lambda} n_x x} = \sum_{x \in X_\lambda} n_x \bar{x} = \sum_{x \in X_\lambda} n_x \hat{\lambda}$$

だから $\sum_{x \in X_\lambda} n_x = 1$ である. 従って $\alpha_x^{(v_\lambda)} \in \frac{1}{m_\lambda} \mathbb{Z}$ かつ $\sum_{x \in X_\lambda} \alpha_x^{(v_\lambda)} = \frac{1}{m_\lambda}$ が分かった. そこで

$$n_\lambda := \min \left\{ n > 0 \mid \text{ある } x \in X_\lambda \text{ に対して } \alpha_x^{(v_\lambda)} \equiv \frac{n}{m_\lambda} \pmod{1} \right\}$$

$$F_\lambda := \left\{ x \in X_\lambda \mid \alpha_x^{(v_\lambda)} \equiv \frac{n_\lambda}{m_\lambda} \pmod{1} \right\}$$

とすれば (これらは v_λ の取り方によらない), $F_\lambda \subset X_\lambda$, $0 < |F_\lambda| < \infty$ である.

あとは $F_\lambda \subsetneq X_\lambda$ を示せばよい. これは $|X_\lambda| = \infty$ のときは明らかだから $|X_\lambda| < \infty$ としてよい. $F_\lambda = X_\lambda$ と仮定する. 即ち任意の $x \in X_\lambda$ に対し $\alpha_x^{(v_\lambda)} \equiv \frac{n_\lambda}{m_\lambda} \pmod{1}$ である. このとき $\frac{1}{m_\lambda} = \sum_{x \in X_\lambda} \alpha_x^{(v_\lambda)} \equiv \frac{n_\lambda}{m_\lambda} m_\lambda \equiv 0 \pmod{1}$ となり $m_\lambda > 1$ に矛盾する. \square

定理 4. 次の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. R を環, $\{M_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を R -加群の族とする. 全ての $\lambda \in \Lambda$ について M_λ が射影的ならば, $M := \bigoplus_{\lambda \in \Lambda} M_\lambda$ も射影的である.
3. 任意の環 R に対して, 任意の自由 R -加群は射影的.
4. 任意の自由アーベル群は射影的.
5. ある環 R が存在して, 任意の自由 R -加群は射影的.

証明. (1 \implies 2) 任意の全射準同型 $f: N \rightarrow L$ と準同型 $g: M \rightarrow L$ を取る. $\lambda \in \Lambda$ に対し $i_\lambda: M_\lambda \rightarrow M$ を標準的な埋め込みとして, $A_\lambda := \{h_\lambda: M_\lambda \rightarrow N \mid f \circ h_\lambda = g \circ i_\lambda\}$ と置く.

$$\begin{array}{ccccc}
 N & \xrightarrow{f} & L & \longrightarrow & 0 \\
 & \nearrow h & \uparrow g & & \\
 & & M & & \\
 & \nearrow h_\lambda & \uparrow i_\lambda & & \\
 & & M_\lambda & &
 \end{array}$$

M_λ は射影的だから $A_\lambda \neq \emptyset$ である. よって選択公理により $(h_\lambda)_{\lambda \in \Lambda} \in \prod_{\lambda \in \Lambda} A_\lambda$ が取れる. すると直和の普遍性から $h: M \rightarrow N$ で $h \circ i_\lambda = h_\lambda$ となるようなものが存在する. このとき $f \circ h \circ i_\lambda = f \circ h_\lambda = g \circ i_\lambda$ だから $f \circ h = g$ である.

※ 逆「 M が射影的 \implies 各 M_λ が射影的」は選択公理によらず成り立つ。

(2 \implies 3) R 自身を R -加群とみるとき, R は射影的. よって自由 R -加群 $\bigoplus R$ は射影的である.

3 \implies 4 と 4 \implies 5 は明らか.

(5 \implies 1) 選択公理と同値な AMC を示す.

※ AMC (= the Axiom of Multiple Choice) とは次の命題のこと.

非空集合の族 $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ に対し, 有限集合の族 $\{F_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ で
 任意の $\lambda \in \Lambda$ に対し $\emptyset \neq F_\lambda \subset X_\lambda$ となるものが存在する.

同値性の証明は the Axiom of Multiple Choice を参照.

$\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を互いに素な非空集合の族とする. $X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ と置く. Λ で生成される自由 R -加群を M とし, X で生成される自由 R -加群を N とする. X_λ の元を λ に写す全射 $X \rightarrow \Lambda$ から自然に全射準同型 $f: N \rightarrow M$ が得られる.

$$\begin{array}{ccc} N & \xrightarrow{f} & M \longrightarrow 0 \\ & \nwarrow h & \uparrow \text{id}_M \\ & & M \end{array}$$

仮定より自由 R -加群 M は射影的, よってある $h: M \rightarrow G$ が存在して $f \circ h = \text{id}_M$ となる. $\lambda \in \Lambda \subset M$ に対し $h(\lambda) = \sum_{x \in X} \alpha_{\lambda,x} x$ ($\alpha_{\lambda,x} \in R$ は有限個を除いて 0) と書く.

$\lambda = f \circ h(\lambda) = \sum_{\mu \in \Lambda} \left(\sum_{x \in X_\mu} \alpha_{\lambda,x} \right) \mu$ であり, 表現の一意性から $\sum_{x \in X_\lambda} \alpha_{\lambda,x} = 1$ となる. 故に $F_\lambda := \{x \in X_\lambda \mid \alpha_{\lambda,x} \neq 0\} \subset X_\lambda$ は空でない有限集合である. \square

※ 「AMC \implies 選択公理」には基礎の公理が使われているので, 5 \implies 1 の証明も基礎の公理を使っていることになる. 4 \implies 1 は基礎の公理を使わずに証明できる.

証明. 選択公理と同値な次の命題を示す.

集合族 $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ が「任意の $\lambda \in \Lambda$ に対し $|X_\lambda| \geq 2$ 」を満たすとき,
 有限集合の族 $\{F_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ が存在して任意の $\lambda \in \Lambda$ に対して $\emptyset \neq F_\lambda \subsetneq X_\lambda$ となる.

※同値性の証明は the Axiom of Multiple Choice の定理 2 を参照.

5 \implies 1 の証明と同様にして $\alpha_{\lambda,x} \in \mathbb{Z}$ を定めて $F_\lambda := \{x \in X_\lambda \mid \alpha_{\lambda,x} > 0\}$ と定める. 勿論 $\emptyset \neq F_\lambda \subset X_\lambda$ である. 今 $\sum_{x \in X_\lambda} \alpha_{\lambda,x} = 1$ で $|X_\lambda| \geq 2$ だから $F_\lambda = X_\lambda$ はありえない. 故に $\emptyset \neq F_\lambda \subsetneq X_\lambda$ となる □

定理 5. k を体とするとき, 次の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. k -線型空間は入射的.
3. k -線型空間は射影的.
4. 基底を持つ k -線型空間は射影的.

証明. (1 \implies 2) 体は単項イデアル整域で, 線型空間は可除だから定理 3 の条件 3 より明らか.

(2 \implies 1) 選択公理と同値な「任意の k -線型空間 V とその部分空間 A に対し, A の補空間 B が存在する」を示す.

※ 同値性の証明については線型空間 (その他) を参照.

V を k -線型空間とし $A \subset V$ を部分空間とする. 仮定 (2) より A は入射的である. 故に, 次の図式を可換にする線型写像 $f: V \rightarrow A$ を得る.

$$\begin{array}{ccc} 0 & \longrightarrow & A & \xrightarrow{\subset} & V \\ & & \text{id}_A \downarrow & \swarrow f & \\ & & A & & \end{array}$$

$B := \ker f$ とすれば $A \oplus B = V$ である.

(1 \implies 3) V を k -線型空間 V とする. 選択公理により V の基底が存在し, V は自由 k -加群である. 故に定理 4 の条件 3 により V は射影的である.

(3 \implies 4) 明らか.

(4 \implies 1) AMC を示す. $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を互いに素な非空集合の族とする. $X := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$ と置く. $f: X \rightarrow \Lambda$ を $f(x) := (x \in X_\lambda \text{ となる } \lambda)$ で定める. 集合 B に対して $k^{(B)}$ で B を基底とする k -線型空間を表すと, f から線型写像 $\bar{f}: k^{(X)} \rightarrow k^{(\Lambda)}$ が自然に得られる. f が全射だから, \bar{f} も全射である. 仮定 (4) より, $k^{(\Lambda)}$ は射影的, よって次の図式を

可換にする線型写像 $g: k(\Lambda) \rightarrow k(X)$ が存在する.

$$\begin{array}{ccc} k(X) & \xrightarrow{\bar{f}} & k(\Lambda) \longrightarrow 0 \\ & \nwarrow g & \uparrow \text{id} \\ & & k(\Lambda) \end{array}$$

$\lambda \in \Lambda$ に対し $g(\lambda) = \sum_{x \in X} a(x, \lambda)x$ と一意に表す. この表示を使って

$$F_\lambda := \{x \in X_\lambda \mid a(x, \lambda) \neq 0\}$$

と置く. $\sum_{x \in X} a(x, \lambda)x$ は有限和だから F_λ も有限集合である. また

$$\begin{aligned} \lambda &= \text{id}_{k(\Lambda)}(\lambda) = \bar{f}(g(\lambda)) = \bar{f}\left(\sum_{x \in X} a(x, \lambda)x\right) = \sum_{x \in X} a(x, \lambda)\bar{f}(x) \\ &= \sum_{\lambda \in \Lambda} b_\lambda \lambda \quad \left(b_\lambda := \sum_{x \in X_\lambda} a(x, \lambda)\right) \end{aligned}$$

となるから, 表現の一意性より $a(x, \lambda) \neq 0$ となる $x \in X_\lambda$ は存在する. 即ち $F_\lambda \neq \emptyset$. 故に AMC が成り立つ. \square

では EI(**Ab**) や EP(**Ab**) そのものは ZF で証明できるのであろうか, という以下のこと知られている.

定理 6. 非自明な入射的アーベル群の存在は ZF で証明できない. よって EI(**Ab**) は ZF で証明できない. \square

また, EP(**Ab**) からは制限された選択公理の一つである DMC(Dependent Multiple Choice) が従うことが知られている. ここから EP(**Ab**) が ZF で証明できないことが分かる.

※ 以下の命題を DMC という.

X を非空集合, R を X 上の二項関係で「任意の $x \in X$ に対してある $y \in Y$ が存在して xRy 」を満たすとする. $x_0 \in X$ を取る. このときある列 $\{F_n\}_{n=0}^\infty$ が存在して $F_0 = \{x_0\}$, $F_n \subset X$, $0 < |F_n| < \infty$ と「任意の $n \in \mathbb{N}$ と $x \in F_n$ に対して, ある $y \in F_{n+1}$ が存在して xRy 」を満たす.

定理 7. EP(**Ab**) \implies DMC

証明. DMC と同値な次の命題を示す.

$\{X_n\}_{n=0}^\infty$ を互いに素な非空集合の族で, $|X_0| = 1$ とする. $X := \bigcup_{n=0}^\infty X_n$ として, 全射 $f: X \rightarrow X$ は「 $x \in X_{n+1}$ に対して $f(x) \in X_n$ 」を満たすとする. このときある $\{F_n\}_{n=0}^\infty$ が存在して $F_n \subset X_n$, $0 < |F_n| < \infty$, $f(F_{n+1}) = F_n$ となる.

これを示すため, G を X で生成される自由アーベル群とする. $X_0 = \{x_0\}$ と書く. EP(Ab) により射影的アーベル群 P と全射準同型 $f: P \rightarrow G$ が存在する. $g: G \rightarrow G$ を

$$g(x) := \begin{cases} 0 & (x \in X_0) \\ f(x) & (x \in X \setminus X_0) \end{cases}$$

により定まる準同型とする. g は全射である. よって $g \circ f$ も全射である.

$$\begin{array}{ccccc} P & \xrightarrow{f} & G & \xrightarrow{g} & G \\ & & & & \uparrow f \\ & & & & P \\ & \swarrow h & & & \end{array}$$

P が射影的だから, ある $h: P \rightarrow P$ が存在して $f = g \circ f \circ h$ となる. f は全射だから $f(p) = x_0$ となる $p \in P$ が存在する.

$$E_n := \{x \in X_n \mid x \text{ が } f \circ h^n(p) \in G \text{ の表示に現れる}\}$$

として $F_0 := E_0, F_{n+1} := E_{n+1} \cap f^{-1}(F_n)$ と定める. もちろん $F_n \subset X_n, 0 < |F_n| < \infty$ である. よって $f(F_{n+1}) = F_n$ を示せばよい. $f(F_{n+1}) \subset F_n$ は定義から明らか. $x \in F_n$ とする. $E_{n+1} = \{y_0, \dots, y_s\}$ と置けば $f \circ h^{n+1}(p) = m_0 y_0 + \dots + m_s y_s$ と書ける. よって $f \circ h^n(p) = g \circ f \circ h \circ h^n(p) = g(f \circ h^{n+1}(p)) = m_0 g(y_0) + \dots + m_s g(y_s)$ である. $x \in E_n$ だから, ある番号 i について $x = g(y_i) = f(y_i)$ となる. 故に $y_i \in E_{n+1} \cap f^{-1}(F_n) = F_{n+1}$ であり, $x \in f(F_{n+1})$ となる. \square

系. EP(Ab) \implies Urysohn の補題

証明. DMC \implies Urysohn だからである. Urysohn の補題を参照. \square

参考文献

- [1] Andreas Blass, Injectivity, projectivity, and the axiom of choice, Trans. Amer. Math. Soc. 255 (1979), 31-59.

[http://www.ams.org/journals/tran/1979-255-00/
S0002-9947-1979-0542870-6/home.html](http://www.ams.org/journals/tran/1979-255-00/S0002-9947-1979-0542870-6/home.html)

[2] Horst Herrlich, *Axiom of Choice*, Springer, 2006